



神奈川県漢詩連盟創立15周年記念

漢詩自由詠コンクール作品集



漢詩自由訳コンクール作品集目次

経過	3	王建「新嫁娘」	18
選評	4	特別賞	
岡崎満義	4	住田笛雄「八秩偶成」	19
三村公二	6	応募作品集（課題詩部門・受付順）	
中島龍一	8	孟浩然「春曉」	20
受賞作（課題詩部門「春曉」）		新井治仁	21
最優秀作	10	瀧川智志	22
大谷明史	10	山口幸雄	23
優秀作	11	高津有二	24
室橋幸子	11	五嶋美代子	25
犬飼勇風	12	葛清昭	26
松本祐輔	13	牛山知彦	27
柴本信子	14	一沙鷗	28
特別賞	14	谷戸山民	29
受賞作（自由選択詩部門）		駆けつけゾロ	30
最優秀作	15	住田笛雄	31
城田六郎「酒匂川畔村酒」	15	小林迪雄	32
優秀作	16	三浦昭二	33
張九齡「照鏡見白髮」	16		
高津有二	16		
李白「子夜呉歌」	17		
山口幸雄	17		

孟浩然「春曉」	志摩つち	33	谷戸山民「倣楓橋夜泊」	谷戸山民	49
〃	板本旅石	34	陸游「宿楓橋」	谷戸山民	50
〃	メイ・スズラン	35	王維「鹿柴」	驅けつけゾロ	51
〃	カモメ	36	李白「山中問答」	南上清一郎	52
〃	うめむすび	37	大槻磐溪「平泉懷古」	犬飼勇風	53
<b>応募作品集（自由選択詩部門・受付順）</b>			杜牧「題烏江亭」	小林迪雄	54
杜牧「清明」	山口幸雄	38	城野静軒「舟中聞子規」	三浦昭二	55
杜牧「清明」	蔦清昭	39	權德輿「嶺上逢久別者又別」	忍冬	56
王維「鹿柴」	高津有二	40	于武陵「勸酒」	バル	57
王維「送元二使安西」	高津有二	41	李白「山中與幽人對酌」	二期生某	58
司馬光「客中初夏」	蔦清昭	42	李白「子夜吳歌」	二期生某	59
朱熹「偶成」	山口幸雄	43	李白「春夜落城聞笛」	大野若人	60
蘇舜欽「夏意」	牛山知彦	44	白居易「池上」	板本旅石	61
權德輿「嶺上逢久別者又別」	一沙鷗	45	趙孟頫「老態」	カモメ	62
李白「早發白帝城」	山口幸雄	46	曹植「七步詩」	堀端保聖	64
白居易「對酒 其四」	鈴木正敏	47	朱熹「偶成」	うめむすび	66
張繼「楓橋夜泊」	谷戸山民	48			

# 漢詩自由訳コンクール

自由訳コンクール担当 山口 幸雄

## 経過

二〇二一（令和三）年、神奈川県漢詩連盟は結成十五周年記念行事の一つとして、会員を対象に、漢詩の自由訳コンクールを行いました。

孟浩然の「春暁」の訳を競う課題詩部門には23人、23首の応募があり、自由に詩を選ぶ自由選択詩部門には23人32首の応募がありました。

審査は8月4日、岡崎特別相談役を審査委員長、三村会長、中島副会長を審査委員として実施され、次のとおり受賞作が決定しました。

### 課題詩部門

最優秀作 大谷明史

優秀作 室橋幸子

犬飼勇風

松本祐輔

特別賞 柴本信子

## 自由選択詩部門

最優秀作 嶋内隆行 「酒匂川畔村酒」

優秀作 高津有二 「照鏡見白髪」

山口幸雄 「子夜呉歌」

佐藤三祿 「新稼娘」

特別賞 住田笛雄 「八秩偶成」

いずれも最優秀作の賞品は、石川忠久先生漢詩色紙、優秀作は15周年記念エコバッグ、特別賞は15周年記念クリアファイルです。

## 選評

面白いよ、漢詩の自由詠 岡崎 満義

1980年4月、スポーツ総合誌「Number」を創刊したとき、提携誌「スポーツイラストレイテッド」誌はよく売れた雑誌で、毎夏、美人女優を南の島へ連れて行き、水着特集号を作っていた。それを「Number」にもせたのだが、さて、キャプションをどうしようかと迷った。考えあぐねて、表紙に使った女優には孟浩然の「春曉」を戯訳してのせ

た。

春眠不覺曉

處處聞啼鳥

夜來風雨聲

花落知多少

アノ娘ハ夢色眠り色

鳥ノ鳴クヨニ愛ラシイ

夜ノ嵐ヤ落下ノ憂イ

知ルヤ知ラズヤ

イマ夢ノ中

このほかにも戯訳をいくつかつけたが、もう忘れてしまった。

今回の漢詩の自由訳はどれも楽しく読めた。七五調であれ自由な口語調であれ、筆者の生活感覚がにじみ出ていて感心した。

選には入らなかつたが、大野若人さんの

春夜洛城聞笛

李白

誰家玉笛暗飛聲

散入春風滿洛城

此夜曲中聞折柳

何人不起故園情

どこの家やろ、笛の音が聞こえるなあ

風に乗って、都じゅうに響いてるわ

別れの曲も吹いてはったで

なんや、実家の丹波が懐かしいなあ

訳者は「京都を想定して近畿方言で訳した」と書いているが、こういう自由奔放な訳に感心する。これからもこの試みはつづけてほしい。漢詩を作る、漢詩に自由な日本語訳をつける、どちらも創作意欲にもとづくものだ。どんどん進めてほしい。

漢詩自由訳コンクールの審査を終えて

三村 公二

自由訳コンクールの審査を引き受けた時、以前、漢詩に全く縁のない川柳好きの友人に井伏鱒二の「厄除け詩集」（訳詩の所）を紹介したら、これは面白い、川柳作りの参考になる、これなら漢詩もよく理解できると喜んでくれた事を思い出した。川柳と自由訳ではワサビの効かせ方



など共通点が多いのであろう。

漢詩自由訳は調子のよい七五調のリズムは欠かせないものの、その詩の背景、作者の隠された意図を読み取らないと、空虚なものになってしまい、読む人の心を打たない。自由訳が単なる言葉の遊びになつてしまつては、全くつまらない。言い換えれば、自由訳が白文の読み下し文とその意味する所が相通じている事が必要不可欠の要件だと思ふ。

そういう観点から応募作品の審査を行ったが、力作が多く、選考には苦労した。

三人の審査員の審査結果のふたを開けてみると、受賞者は、中堅の活躍もあるが、ベテランの方が多く、しかも皆さん詩が上手な方ばかりである。漢詩を作る時の詩語の選び方のセンスは、自由訳での言葉の選び方のセンスに相通じるものが有るのだろうか。

そのなかにあつて、自由選択詩部門で若手の島内隆行さんが最優秀作を受賞された事、昨年神漢連に入会されたばかりの佐藤三祿さんが自由選択詩部門の優秀作に選ばれたことは特筆ものである。島内さんは、故城田六郎舎友の文部科学大臣賞受賞作品を選択され、ご自身も散策された経験のある場所だという事もあるが、作者の意図を的確に把握していて、作品は若手らしくリズム感が躍動している。佐藤さんは選んだ詩が王建の「新嫁娘」で、作品は初々しい若いお嫁さんの所作を軽妙、細やかに詠まれ、女性の作品かと思つた程である。

このコンクールを期に皆さん方が漢詩自由訳をいろいろな局面で活用されることをお勧めしたい。例えば、年賀状に自作の詩とその自由訳を付けて出すと洒落ていて、貰つた方も楽しく

なる。私の友人がこれなら漢詩もよく理解できるといったように漢詩の普及にも一役買う事ができると思っている。

### 自由訳の審査をしての感想 中島 龍一

課題詩は孟浩然の「春暁」です。有名な五絶なので、色々な本に解釈が沢山ありますが、春眼暁を覚えずが、結論のようなものであるとされています。俗人たちが朝早くから勤めに出ることを見下して、立身とか出世の世界には関係のない自分を悠然と楽しんでいるのです。

最優秀作の大谷さんの訳は「夢の中」にいる自分を中心に据えていて、読みを発音すると、いたくリズムが心地よく響きます。結句の「花も散りぬるを」で、まじめな読み手を突き放して、世の中を見下した雰囲気が絶妙です。

優秀作の室橋さん、犬飼さん、松本さんも七五調の読みを考慮して調子を整えている点が、読み手を心地よくしてくれて、すばらしいですね。

自由訳はどの漢詩を選択するかが肝要であると思われる。有名な詩にするか、好きな詩にするか、珍しい内容の詩にするか、時宜を得た詩にするか、訳者の幅広い読書量と知識によっても左右されるでしょう。

この最優秀作の嶋内さんは時宜を得た詩を選んでいきます。城田六郎氏の文科大臣賞受賞作「酒匂川畔村酒」を取り上げています。地元の山村で造る濁酒を詠った漢詩を、やさしい口調

で、まろやかな酒を引き立てている訳文となっています。原作者の城田さんも喜んでくれていることでしょう。

他にも、優秀作の佐藤さんの「新嫁娘」は嫁になりきった物言いに仕立てて、「どうしよう…どうしよう…。」の訳が面白く際立っています。

自由訳はやはり、平易さと面白さと、意表を突いた表現が試されます。そういう意味でよく考えた訳になっています。

## 受賞作（課題詩部門）

### （課題詩）

春曉 孟浩然

春眠不覺曉 春眠曉を覚えぬ

處處聞啼鳥 处处啼鳥を聞く

夜來風雨聲 夜來風雨の聲

花落知多少 花落つること知る多少ぞ

最優秀作

大谷 明史

春の夜明けに

春の朝日は夢の中

遠く近くに鳥の声

昨夜は嵐が吹き荒れた

咲かせた花も散りぬるを

〈訳者の一言〉起句に「曙」を使いたい処ですが、土岐善麿先生使用済みに付き断念しました。結句「いろは歌」に無常観を忍ばせたのは些か脱線かも知れません。

優秀作

室橋 幸子

春の朝

何か気だるくて起きたくない

あれ鳥の声 我を呼ぶ

思えば夕べの激しい風雨

庭の花たち 落ちちやったかなあ

優秀作

犬飼 勇風

花の命は短くて

春の眠りに誘われて

啼くなうるさい眠たいぞ

昨夜以来の雨風あめかぜで

花ビラ散らすは耐えられん

〈訳者の一言〉 なぜか桜の花が咲くと、雨が降るのですね。

優秀作

松本 祐輔

春の夜明けは夢うつつ

数鶏の声枕辺に

窓辺を敲く夜雨烈し

庭花如何ほど散り果てむ

〈訳者の一言〉 原詩を七五調で詩的に表現することに窮した。

特別賞

柴本 信子

春の朝って ぐっすり 眠れるわ！

小鳥は あちらこちらで

ちゅんちゅん ぴいぴい ほうほけきよ

でも夜になるとね

風は ぴゅうぴゅう 雨は ざあざあ なの

お花は ひらひら散って

私のはらはら もう眠れないわ！

〈訳者の一言〉 小鳥の声、風雨の声とあるので、オノマトペで表現してみました。



受賞作（自由選択詩部門）

最優秀作

嶋内 隆行

酒匂川の畔の村酒

富士の霊水流れるほとり

秘伝のどぶろく醸す村

酒杯を重ねて日が暮れた

金を惜しむは愚かなことよ

〈訳者の一言〉 城田先生、文部科学大臣賞受賞おめでとうございます。

この訳で合格点はいただけるでしょうか。

酒匂川畔村酒 城田六郎

嶽麓發源清冽川 岳麓に源を發す清冽の川

麴塵粳稻僻村傳 麴塵粳稻僻村に伝う

緑醅初熟醍醐味 緑醅初めて熟し醍醐の味

一斗十千何惜錢 一斗十千何ぞ錢を惜しまんや

優秀作

高津有二

カツテノユメハ イマイズコ  
イツノマニヤラ シラガダヨ  
カガミノナカノ コノカオハ  
オレノモノダヨ カナシムナ

照鏡見白髪

張九齡

宿昔青雲志

宿昔青雲の志

蹉跎白髮年

蹉跎たり白髮の年

誰知明鏡裏

誰か知らん明鏡の裏うち

形影自相憐

形影自ずから相憐れまんとは

優秀作

山口 幸雄

都の夜空に 月さやか  
きめた  
砧の音が 耳をうつ

いつまでやまぬ 秋の風  
思いはやまぬ 彼方の地  
いくさの果てるは いつの日か  
あなたの帰るは いつの日か

〈訳者の一言〉 固有名詞を抜いてみました。

子夜呉歌

李白

長安一片月	長安一片の月
萬戸擣衣聲	万戸衣を擣つ声
秋風吹不盡	秋風吹いて尽きず
總是玉關情	総て是れ玉関の情
何日平胡虜	何れの日か胡虜を平らげて
良人罷遠征	良人遠征を罷めん

優秀作

佐藤 三禄

お嫁さん今日からいよいよ台所

両手もきれいに お味噌汁

姑かみさまお口に合うかしら

どうしよう・・・どうしよう・・・

小姑ねえさま

ちよつと嘗めてみて

うむうむ、よしよし・・・

う・ま・く・行・っ・た !!

〈訳者の一言〉 初々しいお嫁さん、ずいぶん昔の記憶です。

新嫁娘

王建

三日入厨下

三日厨下に入り

洗手作羹湯

手を洗いて羹湯を作る

未諳姑食性

未だ姑の食性を諳んぜず

先遣小姑嘗

先ず小姑をして嘗めしむ

特別賞

住田 笛雄

八十健康ありがたし

酒と吟とで若返る

読書詩作でボケ防ぐ

まだ頑張るぞ意気軒昂

〈訳者の一言〉 八十歳の誕生日の自作の詩を取り上げた。もうすぐ八十三歳になるが、気持ちは変わらない。思いを感じ取っていただければ幸甚です。

八秩偶成

住田 笛雄

居然八秩健而康

居然八秩 健にして康

愛酒高吟却老方

愛酒高吟は老を却くるの方

日夕讀書詩亦就

日夕書を読み 詩も亦た就る

長生所望意軒昂

長生は望む所 意は軒昂

応募作品集（課題詩「春曉」）受付順

新井 治仁

ハルハネムイヨヒルマデモ  
シゴトニンゲンカマビスシ  
ユメノナカデモオオアラシ  
イツマデツツクサクラチル

〈訳者の一言〉 コロナ禍の受験生は大変ですね。笑って新年度を迎えられますように！

瀧川 智志

春は眠いよ　もう朝だ  
鳥がピーチク　啼いてるよ  
夜は雨風あめかせ　目が覚めた  
花がいつぱい　落ちたろう

〈訳者の一言〉　まずは、七五調で、ご機嫌伺い。

山口 幸雄

春の目覚めは うつらうら  
あちこち鳥が チチチチチ  
ゆうべは嵐が 吹き荒れた  
桜もさぞや 散りぬるをわか

へ訳者の一言へ 「うつらうつら」ではなく、「うつらうら」です。最後は詩の勢  
いというやつで…



高津 有二

ネボケマナコノ　ハルノアサ  
キコエテキタヨ　トリノコエ  
サクヤノアメハ　オオブリデ  
ノコツテルカナ　モモノハナ

〈訳者の一言〉

蔦 清昭

別に春には限らぬが  
街が動かによ 目は覚めぬ  
そういや 夜中にひとゆすり  
何処かで被害はなかつたか

〈訳者の一言〉 最近また地震が多い

五嶋 美代子

朝

目が覚めた：

でも

そのまま。

布団にくるまったまま瞼も開けない このひととき。

あら 鳥が啼いているわ、もう夜が明けたのね。

そういえばゆうべは春の嵐。

お花はたくさん落ちちやったかしら。

〈訳者の一言〉 女孟浩然にしてみました。

牛山 知彦

春の朝、ふとんの中はあつたかいんだからあ  
ところどころで小鳥も鳴いて、気持ちいい  
ゆうべは雨風強かったので  
花のふとんが出来ているかも

〈訳者の一言〉 年末に、「あつたかいんだからあ」の漫才芸人（クマムシ）を  
久々にテレビで観て、何だか使ってみたくなりました。

## 一 沙鷗

ああ、春の朝はうつらうつら…夢心地なのよ。なのに、あつちこつちで、鳥がピイチク。パアチク。夜は夜で雨、風が眠りを妨げる。あゝやんなつちやうな、花がどんなに落ちたつて、どうでもいいの。お願い、もう少し眠らせて！

〈訳者の一言〉 この詩の意識は出尽くした感があり、意表を突くような面白みは發揮できませんでした。

谷戸山民

ハルノメザメ

ハルノ アケボノ ユメサメズ  
ネミミニ ミズノ トリノ コエ  
サクヤ マドウツ アメカゼ ニ  
タエタ ハナビラ イカホドカ

春の目覚め

春の曙 夢 覚めず  
寝耳に 水の 鳥の声  
昨夜 窓 打つ 雨 風に  
耐えた 花卉 如何ほどか

〈訳者の一言〉 七五調のリズムで句作りしたので、無理無く唱歌『おたまじゃくしは蛙の子』の節で歌えます。

## 駆けつけゾロ

春の曙 床の中。

夜中の風で巣が落ちた鳥の噪ぎで目が覚めた。

気が付く今日は日曜日。

倒れた鉢植いかほどぞ

のんびり庭でも清めるか。

へ訳者の一言へ 宮仕えのひと時の休息

住田 笛雄

春の曙まだ眠し

うつつに聞くは鳥の声

夕べは雨風強かりし

花もたくさん散りしかな

〈訳者の一言〉 名訳多数のこの詩を課題に取り上げるとは。応募する側にとつては過酷です。

一応七五調で声に出して心地良いように挑戦。



小林 迪雄

春のあけぼの 私は床の中だ。  
さわがしい鳥声に起こされた、  
昨夜の風雨は強かったなあ  
庭の草花はどうしているだろうか、  
外に出て慰めてやろう。

へ訳者の一言◇ 実体験としての感想。

三浦昭二

春の朝

春の朝 眠り深く

覚め難し

あちこちに聴く 鳥の声

終夜 風雨荒れ

花散らすは 幾ばかりか

〈訳者の一言〉 あまりにも有名な詩なので、自由に訳すことには気が引けるが、  
敢えてチャレンジした。

志摩っち

ふとんにくるまり朝寝して  
百のさえずり聞いている  
ゆうべは雨風ひどかった  
花はどれほど散ったやら

〈訳者の一言〉 推敲を重ねようやく出来ました。

板本 旅石

春のあけがた

春のあけがた、仕事無き身は、ウトウトと

小鳥のさえずり、ベッドの中で

昨夜は風雨、吹きすさび

花ビラの絨毯、できただろうか

へ訳者の一言◇年を取ると目覚めが早くなるが、春の朝はゆったりと寝ていたい。

## メイ・スズラン

「深夜ラジオ」を聴いてしまい明け方は眠い眠い。

小鳥の聲かと思いきや、隣の植木屋の鋏の音。ああ、うるさいわ！

夜来の雨、嵐。

花のみならず、木々も倒れ、滂沱の涙

〈訳者の一言〉 こんな「訳」ありでしょうか。とんでもない「訳」。

詩情なくごめんなさい。

隣の家の早朝からの芝狩りがうるさいのです。

## カモメ

ネムイネムイアアネムイ

チュンチュンスズメコノマドロミヲサマサナイデオクレ

ヨドオシアメカゼウルサクテ

ハナチルニワガキニカカル

〈訳者の一言〉 全くその気がなくて課題詩のことも知らず即席でつくりました。  
オハズカシ。

うめむすび

春の朝は明けたのも気がつかない

どこかで鳥が鳴いている

きのうの夜の風雨はとてみどかった

庭の花はきつといっぱい散ってしまっただろう

へ訳者の一言へ まだふとんにいたい気持です。

応募作（自由選択詩）受付順

清明

杜牧

清明時節雨紛紛

清明の時節雨紛紛

路上行人欲斷魂

路上の行人魂を断たんと欲す

借問酒家何處有

借問す酒家は何れの処にか有る

牧童遙指杏花村

牧童遙かに指す杏花村

山口 幸雄

清く明るい時節というが

こぬか雨ふる街道は

旅行く心が折れそうだ

どこかで一杯やりたいな

道行く子供に聞いたらば

あんず花咲く村へ行け

〈訳者の一言〉 最初「牛引く子供」にしたが、不自然なので「道行く」にしました。



清明

杜牧

清明時節雨紛紛

清明の時節雨紛紛

路上行人欲斷魂

路上の行人魂を断たんと欲す

借問酒家何處有

借問す酒家は何れの処にか有る

牧童遙指杏花村

牧童遙かに指す杏花村

蔦 清昭

降るのか雨よ　こんな日に

まだ家までは　かなりある

折良く見つけた　縄のれん

飲んで待つうち　夜も更ける

〈訳者の一言〉　天気予報は晴れだった。

鹿柴

空山不見人  
但聞人語響  
返景入深林  
復照青苔上

王維

空山人を見ず  
但人語の響くを聞くのみ  
返景深林に入り  
復た照らす青苔の上

高津有二

コンナニシズカ ヤマノナカ  
ダレカイルノカ ヒトノコエ  
ニシノソラカラ ヒガサシテ  
キラキラヒカル アオイコケ

送元二使安西

王維

渭城朝雨浥輕塵

渭城の朝雨輕塵を浥ほす

客舍青青柳色新

客舍青青柳色新たなり

勸君更盡一杯酒

君に勸む更に尽くせ一杯の酒

西出陽關無故人

西のかた陽関を出づれば故人無からん

高津 有二

アサガタノアメ ワカレドキ

ヤドノヤナギモ カナシソウ

グイトノミホセ モウイツパイ

ワスレナイデヨ オレノコト

客中初夏

司馬光

四月清和雨乍晴

四月清和雨乍晴

南山當戶轉分明

南山戸に当たつて転た分明なり

更無柳絮因風起

更に柳絮の風に因つて起こる無く

惟有葵花向日傾

惟だ葵花の日に向かつて傾く有り

蔦 清昭

薄暑の雨の 晴れやすく

窓から望む 山青し

風に飛び交う綿毛は見えず

ひまわりの黄の 日に傾ぐ

へ訳者の一言へ すなおな気持ちで書きました。少し色を交えて。

偶成 朱熹

少年易老學難成 少年老い易く学成り難し

一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んず可からず

未覺池塘春草夢 未だ覺めず 池塘春草の夢

階前梧葉已秋聲 階前の梧葉 已に秋声

### 山口 幸雄

若さにかまけて 遊んでいると

なんにもしないで 歳をとる

ニツチな時間も 大事にしよう

チャホヤされたは 桜を見る会

今じゃ庭には 桐一葉

落ちて 天下の秋を知る

〈訳者の一言〉 社会諷刺にすると賞味期限が短くなってしまうが…

夏意 蘇舜欽

別院深深夏簾清 別院深深として夏簾清く

石榴開遍透簾明 石榴開き遍くして簾を透して明らかかり

樹陰滿地日當午 樹陰地に満ち日は午に当たる

夢覺流鶯時一聲 夢覺むれば流鶯時に一声

### 牛山 知彦

離れの部屋は静まり返り、寝転ぶ夏ごぞ気持ちいい  
庭のザクロは満開で、簾の向こうで真っかつか  
木陰の庭はうす暗く、すっかり寝込んだ真昼時  
ひと夢覚めりや、枝で鶯ホーホケキヨ

〈訳者の一言〉 「春眠」からの連想で、「夏眠」の詩を。

嶺上逢久別者又別 権徳輿

十年曾一別 十年 曾て一別

征路此相逢 征路 此に相逢う

馬首向何處 馬首 何の処にか向う

夕陽千萬峰 夕陽 千万峰

### 一 沙鷗

十年も昔のこと、一たび見捨てられ、今更、此の旅路で巡り会おうとは……。どうして、こんなところへ向かって、きてしまったのだらう。夕日が幾重に重なる峰の彼方に隠れちゃうように、どこかへ消え去りたい

〈訳者の一言〉 作者の権徳輿様に叱られそうです。美しい夕暮れの景色の中での刹那の出会いを、昔別れた人と会いたくもないのに、ひよっこり出会ってしまった、恨み節に変えてみました。

早發白帝城 李白

朝辭白帝彩雲間 朝に辞す白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵一日にして還る

兩岸猿聲啼不住 兩岸の猿声啼いて住まざるに

輕舟已過萬重山 輕舟已に過ぐ万重の山

### 山口 幸雄

あかねさす白帝の城より千里なる

江陵ひとひまでも一日なり

兩岸りようざしの猿ましらのこだま絶えもせで

輕かろき舟過ぐたたなづく山

〈訳者の一言〉 和歌風にしてみました。



對酒 其四 白居易

百歲無多時壯健 百歲多時の壯健なし

一春能幾日晴明 一春能く幾日か晴明

相逢且莫推辭醉 相逢うて且つ酔いを推辭する莫れ

聽唱陽關第四聲 唱うのを聴けよ陽関の第四声を

鈴木 正敏

逢うたからには一杯やろう

人生百歳というがお互いについてまで元気でいるか

春晴れの良き日も少ないよ

たまに逢うたからには先ずは愉快に一杯やろうよ

俺の唄うのを聴いてくれよ

あの王維の陽関を

〈訳者の一言〉 不要不急な外出はするな、三密を避ける、19時以降は飲むなど。このコロナは、こんな貴重な楽しい機会も奪ってくれたものよ。

楓橋夜泊 張繼

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼いて霜天に満つ  
江楓漁火對愁眠 江楓漁火愁眠に對す  
姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外の寒山寺  
夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲客船に到る

谷戸山民

シモ ハ マンテン ウテイ アリ  
イサリビ イツテン コウ クラシ  
ワゴウニセンノ カンザンジ  
ヤハン ノ カネ ガ フネ ニ イル

霜は満天 烏啼 有り  
漁火一点 江 暗し  
和合二仙の 寒山寺  
夜半の鐘が 船に入る

〈訳者の一言〉 結句に「夜 半鐘の声」と有るが本当で、鐘を見ると撞きたがる性分で、寒山寺で喜び勇んで挑戦したが、カアンという軽い「半鐘」の如くで、寒山寺のイメージ「半減」でした。

倣楓橋夜泊 谷戸山民

俗輩萬來塵滿天 俗輩 万來して 塵 天に満ち  
四隣喧噪未甘眠 四隣は喧噪して 未だ甘眠せず  
導游熱辨寒山寺 導游(觀光ガイド) 熱弁す 寒山寺  
曾聽鐘聲到客船 曾て聽く鐘聲 客船に到るを

谷戸山民

セジン サンパイシテ ソウゼンタリ  
シリシリン ノ ジュウニン ヤスラカ ナラズ  
スウニン ノ ドウユウ イクハンノ カク  
シヨウセイ コンニチ フネ ニ イタラズ

世人 参拝して 騒然たり  
四隣の住人 安らかならず  
数人の導游 幾班の客  
鐘聲 今日 船に到らず

(注) 谷戸山民は訳者本人のペンネームです

へ訳者の一言、寒山寺に旅行したときのメモより。各行の最上部の字はサ行の世、四、  
数、鐘の頭韻を試みたものです。

宿楓橋 陸游

七年不到楓橋寺  
客枕依然半夜鐘  
風月未須輕感慨  
巴山此去尚千重

七年 到らず 楓橋寺  
客枕 依然たり 半夜の鐘  
風月 未だ須いず 軽々しく感慨するを  
巴山 此より去りて 尚 千重

谷戸山民

フタタビキタル フウキヨウジ  
ムカシトオナジ カネヲキク  
フウカイナラズ ヨリヨクナシ  
ニンチハトオシ イクセンリ

再び来たる 楓橋寺

昔と同じ 鐘を聞く

風懷 ならず 余力なく

任地は遠し 幾 千里

〈訳者の一言〉 陸游が四川省に赴任の途中で寒山寺の近くに一泊したが、  
已に赴任が半年も遅れていたの、慌ただしい様子がわかる。

鹿柴

空山不見人  
但聞人語響  
返景入深林  
復照青苔上

王維

空山人を見ず  
但人語の響くを聞くのみ  
返景深林に入り  
復た照らす青苔の上

駆けつけゾロ

富士の山頂 雲を見ず  
但だ山腹に雷鳴を聞く  
老若男女 山道に入るも  
復た戻る 峠の茶屋

山中問答 李白

問余何意棲碧山 余に問う何の意ありてか碧山に棲むと

笑而不答心自閑 笑って答えず心自ずから閑なり

桃花流水杳然去 桃花流水杳然として去る

別有天地非人間 別に天地の人間に非ざる有り

南上清一郎

「なんで、こんな山奥に住んでいるか？」

「ハハハ」

のんびりとした、いい気持ちはわからないだろうなあ。

ああ、桃も散って遠くへ流れて行ってしまおうよ。

「ここはどこ？今はいつ？」

〈訳者の一言〉 この詩は、他に「山中にて俗人に答う」とするテキストもある問答形式ですが、李白が自問自答したのではないかとも思えます。官職に就けず、各地に遊んだ感情を醸し出せていたらと思います。

平泉懷古 大槻磐溪

三世豪華擬帝京 三世の豪華帝京に擬す  
朱樓碧殿接雲長 朱樓碧殿雲に接して長し  
只今唯有東山月 只今唯東山の月のみ有つて  
來照當年金色堂 來り照らす当年の金色堂

全景染まる黄金色 こがねいろ 犬飼 勇風

祖父から受け継ぐ豊かさは  
帝都さえも擬えて なぞら  
色とりどりの建物は

裾野に接するまで長く

唯 東山の満月が  
全てを黄金に染めている こがね

〈訳者の一言〉 昼間どんなに豪華に見える風景も、満月にかかると、全てが光と影にはっきり色分けされてしまう。

題烏江亭 杜牧

勝敗は兵家も事期せず  
包羞忍恥は是男兒  
江東子弟多才俊  
捲土重來未可知

勝敗は兵家も事期せず  
羞を包み恥を忍ぶは是男兒  
江東の子弟 才俊多し  
捲土重來 未だ知るべからず

小林 迪雄

事の勝敗は終わってみなければわからない、  
『負けて恥しい』悔しい気持ちをはねに努力しろ  
君は潜在能力は高いのだから  
地力をつけて再度チャレンジしろ！  
今度はきつと勝てるだろう。

〈訳者の一言〉 向上心はいつまでも持っていたい。



舟中聞子規

城野きの静軒

八幡山崎春欲暮

八幡山崎 春暮れんと欲し

杜鵑啼血落花流

杜鵑血に啼いて 落花流る

一聲在月一聲水

一声は月に有り 一声は水

聲裡離人半夜舟

声裏の離人 半夜の舟

舟中時鳥を聞く 三浦昭二

京を離れ

舟 八幡山崎に到る

春深く

啼く時鳥 肺腑を抉る

叫声は何処

花を浮かべ流れる水

朧に照らす中天の月

声に包まれ

行人眠れず

〈訳者の一言〉 私なりに、一幅の絵を思い描いて、その風景と作者の思いを現わしてみた。

嶺上逢久別者又別 權徳輿

十年曾一別 十年 曾て一別

征路此相逢 征路 此に相逢う

馬首向何處 馬首 何の処にか向う

夕陽千萬峰 夕陽 千万峰

遠行の路上で久別した人と、遇逢、又別する感慨 忍冬

そういえば、十年前に一度お別れしたよね？

遠行するこの道で又逢うなんて！

馬に乗って何処へ向かうというんだい？

夕陽に染まった、あの無尽の山々の彼方へさ

〈訳者の一言〉昔よく見たアメリカ西部劇やマカロニウエスタンでお馴染みの光景を思い浮かべて、会話風に書きました。

勸酒 于武陵

勸君金屈卮 君に勧む金屈卮  
滿酌不須辭 滿酌辭するを須いず  
花發多風雨 花発けば風雨多し  
人生足別離 人生別離足る

バル

呑まむ金色の大杯で こんじき  
もう十分は御法度さ  
花咲く時節嵐来て  
人の別れはつきものさ

〈訳者の一言〉

山中與幽人對酌

李白

兩人對酌山花開

一杯一杯復一杯

我醉欲眠卿且去

明朝有意抱琴來

山で隱者と酌み交す 二期生某

花咲く山でさし向かい

一杯一杯もう一杯

眠くなつたな、又来いよ

あす朝軽い琴持つて

〈訳者の一言〉「琴」の語は、我々現代日本人には和琴のイメージが浮かんでしまうので思案しました。幽人にギターは似合わず、ヴィオロンや古楽器リュートでは如何かなどと迷いました。

子夜呉歌

長安一片月  
萬戸擣衣聲  
秋風吹不盡  
總是玉關情  
何日平胡虜  
良人罷遠征

李白

長安一片の月  
万戸衣を擣つの声  
秋風吹いて尽きず  
総て是れ玉関の情  
何れの日か胡虜を平らげて  
良人遠征を罷めん

二期生某

月照らす長安の街  
家々に砧打つ音  
西からの秋風止まず  
ああ、思いは向かう玉門関  
胡どもいつか平らげ  
貴方、貴方、帰り来ませよ

〈訳者の一言〉 太白先生の詩には演劇的效果があり、それが近代人の心に訴えるかと思われます。

春夜洛城聞笛

李白

誰家玉笛暗飛聲  
散入春風滿洛城  
此夜曲中聞折柳  
何人不起故園情

誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす  
散じて春風に入つて洛城に満つ  
此の夜曲中折柳を聞く  
何人か故園の情を起こさざらん

### 大野若人

どこの家やろ、笛の音が聞こえるなあ  
風に乗って、都じゆうに響いてるわ  
別れの曲も吹いてはったで  
なんや、実家の丹波が懐かしいなあ

〈訳者の一言〉 京都を想定して近畿方言で訳しました。

丹波は京都の奥座敷とされ、上方落語の噺にも奥さんの実家（故郷）として出てきます。

池上

山僧対碁坐  
局上竹陰清  
映竹無人見  
時聞下子聲

白居易

山僧 碁きに対して坐す  
局上 竹陰清し  
竹に映じて人の見る無し  
時に聞く 子を下す声

池のほとり 板本 旅石

山寺の僧、ゆったりと囲碁の対局  
碁盤の上に、竹の葉陰がゆれる  
竹におおわれ、観戦するひともなく  
静寂を破り、聞こえてくる碁石を打つ音

〈訳者の一言〉 私も静かな庭園で、ゆったりと囲碁の対局をしたい。

老態 趙孟頫

老態年來日日添

黒花飛眼雪生鬢

扶衰每籍齊眉杖

食肉先尋剔齒櫛

右臂拘攣巾不裹

中腸慘戚淚常淹

移牀獨就南榮坐

畏冷思親愛日簷

老態 年來 日日に添い

黒花 眼に飛び 雪 髯に生ず

衰を扶けては毎に藉よる 眉に齊しき杖

肉を食いては先ず尋ぬ 齒えぐを剔せんる櫛

右臂 拘攣こうれんすれども 巾もて裹つつまず

中腸 慘戚さんせきとして 涙 常ひたに淹す

床を移して独り就く 南榮の坐

冷を畏れて親しまんと思ふ 日のきを愛づる簷



カモメ

この私も近頃めつきり衰えて

目は飛蚊がチラチラ 鬚に至っては真つ白のありさま

いまじやいつも特注の長い杖が無ければ出歩くこともままならぬ  
肉でも食べた日にや爪楊枝のお世話にならにやならん

臂にいたっては曲がったままで満足に手ぬぐいもしぼれやしない  
すっかり涙もろくなりついめそめそと気がふさぐ  
てなわけで風邪でも引いちやたまらない

ひねもす南簷に居座って日向ぼっこ決め込んだ

〈訳者の一言〉 高津さんの脅しに恐れをなして慌てて提出。

七步詩 曹植

煮豆持作羹

豆を煮て持て羹あつものと作し

漉豉以爲汁

豉しを漉して以て汁と為す

萁在釜下燃

萁まめがらは釜の下に在って燃え

豆在釜中泣

豆は釜の中に在って泣く

本是同根生

本は是れ同じ根より生ぜしに

相煎何太急

相煎ること何ぞただ急なるや

## 堀端 保聖

豆ハ優シク煮レバオイシイスープ

味噌ニシテ漉セバ味噌汁ニモナル

まめがら

其ハ釜ノ下、赤々ト燃エ

豆ハ釜ノ中、熱キニ涙ス

豆と其、根は同じ

ソシテ急イデ熱クスルトダイナシデスヨ、兄サン

まめがら

〈訳者の一言〉 兄弟を豆と其まめがらに譬えて訴える弟の切なる思いをわかり

やすく伝えたかった。豆と其の譬えは面白いと思う。七歩で作った人の

才を強く感じる作品である。

偶成 朱熹

少年易老學難成 少年老い易く学成り難し  
一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んず可からず  
未覺池塘春草夢 未だ覺めず 池塘春草の夢  
階前梧葉已秋聲 階前の梧葉 已に秋声

うめむすび

時の流れは早いもの  
あつという間に過ぎ去った  
若いころの夢は今だ果せず  
頭もこんなに薄くなつた

〈訳者の一言〉 好きな詩です。

神奈川県漢詩連盟創立15周年記念  
漢詩自由詠コンクール

令和二年結果及び応募作品集

発行 2021年9月1日

編集 神奈川県漢詩連盟

15周年記念行事企画委員会